東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2010年1月1日

重荷を負う人は、他人の重荷を負うことは出来ない。

ムスリムの皆様。イスラームにおける責任感とは、人それぞれ人生において自由を持っている反面、その人が執った行動には責任が負います。クルアーンには、男でも女でも、そして各団体であっても行ったことについて責任を負わねばならないとしばしば表現されています。人が犯罪を犯したとされれば、その人が責任を負うわねばなりません。従って重荷を負う人は、他の人の重荷を負うことは出来ず、他人に代わって罰を受けることも出来ません。[1]

そのような人が負う責任感とは、生活のあらゆる分野においてもちろんのこと、宗教的な義務を果たす上でも同様です。誰であれ崇拝行為や善行を行えば、その人だけ報償を得ることができます。預言者や高名な人の親戚とか、同じ家系に属すると言っても、来世の救いには一切の保護を与えません。こうした理由から敬愛する預言者（彼に平安あれ）は、私たちの母でもあるファーティマに対して、『娘よ、火から自分を守れ、終末の日に貴女に対して私は、何もすることは出来ません。』[2]と述べられています。

兄弟姉妹の皆様。責任が、個人的であるということは、誰であっても自らの理性と知性を最もよい方法で使い、きちんとした振舞いを必要としています。他人に依存し、自らの責任を放棄することは正しい道ではありません。誰で自らしたことを意識して選別したり、判断しなければなりません。そして結果をよく考えながら行動すべきです。

イスラームは、人それぞれの個性を育むことを目標にすると共に社会的交流と発展をも大切にしています。さらに良いことや善行、そして正義において、社会的相互援助や支え合いを蔑ろにする利己主義を一切認めません。イスラームでは、『自分のことだけ考え、他人の人のことに関係がない』といった考え方や意見はありません。したがって他の人が被っている苦労や災難、そして社会が直面した困難に対して無関心でいることは認められないことです。なぜなら社会的な困難は、その原因になった人や組織だけではなく、社会全体に大きな影響を与える結果をもたらすからです。このことに関してクルアーンにでは『また試みの災厄に対して、あなたがたの身を守れ。それはあなたがたの中の不義を行う者（だけ）に下るものではない。アッラーは懲罰に厳正であることを知れ』[3]と述べられ、この節で記されている不義という言葉は、災難、困難、社会的混乱、不安という意味です。

誠実で責任感をあるムスリムになっていくには、個人的かつ社会的な任務を、共に生活している社会と支え合いながら達成しましょう。もう一つ忘れてはいけないことは、人としての責任を放棄してはいけないということです。それは社会の秩序を脅かす原因となるからです。

[1] 第6章164節; 第2章, 286節; 第29章12節.
[2] ムスリム, イマーン, 399.
[3] 第8章25節.